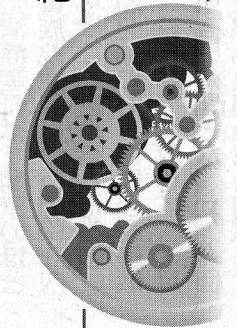


越境精神

小長谷 有紀



梅棹忠夫の残したもの

2

未来について思いえがくうえで、もっとも大切なこと、それは今を知ることだろう。現状認識なしではどこへも進みがたく、立ちすくんでしまうから。ところが、梅棹は言う。「なんにも知らないことはよいことだ」と。

もちろん、ずっと知らないまま、でよいというわけではあるまい。このことには2つの含蓄が込められていた。1つは、知らないからこそ学ぼうという煽動である。もう1つは、大きな声で聞こえて

くことは疑っておくという警告である。

固定観念という思考の境界から自由であれ、という越境精神が埋め込まれていることはないのである。

いつの世にも支配的な言説はあるものだ。

たとえば、太平洋戦争中なら、お国のために死ぬことが正しい、と人びとは教えられ、多くの人がそのように生き、それに逆らう人は非国民扱いされた。こうした当該社会で大いに語られる言説をマ

「大きな声」



「なんにも知らないことはよいことだ」の文言を含む一節がおさめられた『日本研究』のコーナー—大阪府吹田市の国立民族学博物館

新たな価値観 私たちの手で

スター・ナラティブといい、しばしば「大きな物語」と訳される。梅棹忠夫や司馬遼太郎らがそうであったように、戦死を覚悟しながら、からくも生き残った人びとはみな、その後の価値観の転倒におどろき、かつての支配的言説の空しさを十分に悟った。そして、そもそも多勢の論理には注意を要する、という心的態度がつつかわれたのだ。

さらに梅棹の場合は、戦後の学問界で支配的だった左翼思想に与することなく、イデオロギー・フリーであることを信条とした。固定観念に縛られるくらいなら、知らないほうがまだから、「なんにも知らないことはよいことだ」と記したのである。

さしあたって21世紀の舵取りをしなければならなくなった私たちは、まさに何も知らなかった。原子力発電が国際的ビジネスであり、その潤沢な資金によって、安全だという研究が推進され、安全だという番組が作られていたことを、知らなかった。わずかに知る機会もあったのに、大きな声のほうを聞いてしまった。

既得権がある限り、常に大きな声は作り続けられるだろう。これからは暗くなるぞ、作れなくなるぞ、貧しくなるぞといった、もっぱら否定的なイメージで将来がえがかれてしまったらう。

しかしながら、これまでが明るすぎ、作りすぎ、豊かすぎたのだ、と思ひます知恵も私たちに備わっている。これからの大きな声は、既得権をもたない私たち自身で作らう。

(国立民族学博物館教授)